

第 17 話 蘇我氏の滅亡

物部氏を滅ぼした後の蘇我氏は独り朝廷で勢力を振っていたが、後には皇族の宮を攻めたり、皇室の尊厳を侵し 奉 ったりして、無道を極めた。ついに中臣鎌足が起って中大兄皇子を奉じてこれを誅戮した。

馬子のわがまま

物部氏が滅びて後は、独り蘇我氏の勢いが大いに強くなり、肩を並べるほどの家が他になかったので、大臣の馬子は次第にわがままな振舞をやり出したが、聖徳太子がお薨れになってからは、それが一層 甚だしくなった。ある時、彼は無遠慮にも推古天皇に、皇室の御料地である葛城の 県 というところを自分の生まれた土地であるから、賜 って、永く自分の料地にしたいと申上げた。

天皇は御母が蘇我稲目の 娘 で、馬子は叔父に当たらせられてもいたのだから、これには余程お困りになられたらしく、大臣の申すことなら、どんな事でも聴かないことはないのだが、この事ばかりはいけな

いと仰せられて、「若し朕の世にこの 県 を失ったなら、後の天子が言われるであろう。『愚かな 女 が天下を治めていたために、謂れもなくその 県 を失った』と。かくては独り朕が不賢であるばかりでなく、大臣もまた不忠になろう」

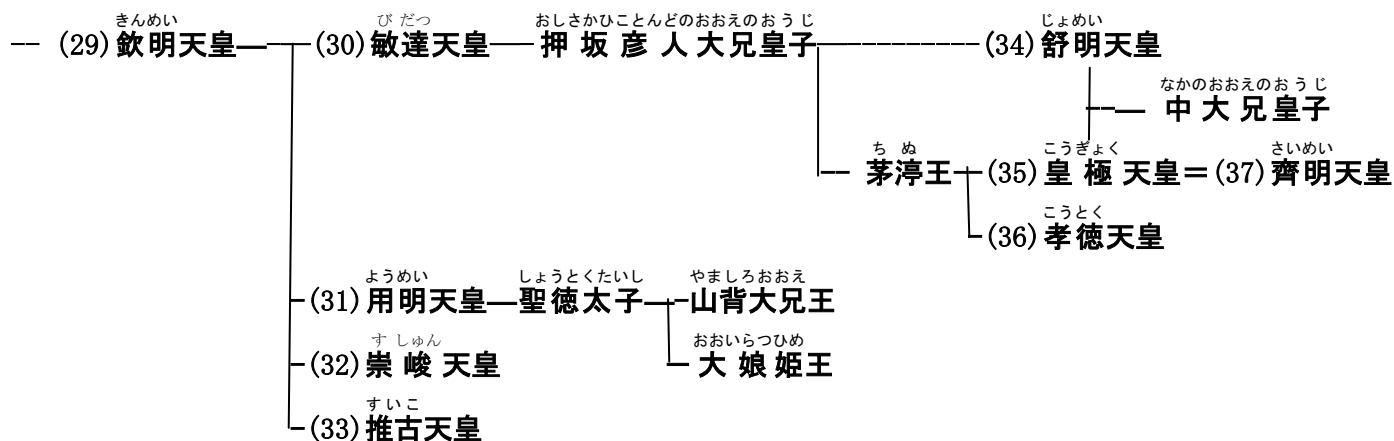
と、ついにお許しにならなかった。この一事を見ても、如何に馬子がわがままを 働 いたかが分ります。

蝦夷のわがまま

馬子は推古天皇の 34 年に死んで、子の蝦夷が後を継いで大臣になったが、これはまた父にも増してわがままでありました。先に聖徳太子がお薨れになって、未だ皇太子がお 定 りにならないうちに、推古天皇は在位 36 年でお崩れになったので、次に誰方が御 位 に即かれるべきかが問題となりました。その時、多くの者は、聖徳太子の御子の山背大兄王が当然お立ちになることとっていました。

ところがこのお方は御賢明の聞こえが高かったので、蝦夷は自分達がわがままをするのに都合が悪いとでも思ったのか、もう一人の候補者であった敏達天皇のご嫡孫である田村皇子を立てて、第 34 代舒明天皇とした。天皇はご病 身 であったために、たびたび温泉へおいでになったりしたから、政治は 全 く蝦夷の 心 のままになったのでした。

舒明天皇は在位僅かに 13 年でお崩れになり、次にお立ちになったのが皇后の第 35 代 皇 極天皇です。天皇は女帝でしたので、蝦夷のわがままはなお一層無遠慮になって、自分は朝廷に出仕せずに、子の入鹿に政治を執らせていた。入鹿は更にまた父にも増してわがままが強く、勢 力が盛んでしたから、盗賊す



蝦夷の僧上

蘇我氏のわがままは斯うして次第に烈しくなり、ついには臣下の身分をも忘れるようになって来た。

皇極天皇の元年に、蝦夷は祖先の廟を葛城の高宮というところに造ったが、それを祭るのに僭越にも、天子の舞楽を用いたのみならず、ついでまた、死んだ後に人を使わずに済むようにといて、諸国の民を集めて二つの大きな墓を造らせ、一つを大陵といい自分の墓とし、一つを小陵と言って入鹿の墓とした。

この工事のために、聖徳太子の家に属している民をも集めて使ったので、太子の御娘の大娘姫王は大いにお怒りになり、「蘇我の臣は政治をほしいままにして多くの無礼を行っている。天に二日なく、地に二王はいないのに、なんで勝手にわが家の民を使うのであるか」といわれたが、これからも両家の間に恨みを生じて、ついに悲惨な事まで起こるに至りました。その事はすぐこの後に述べます。

二年の冬、蝦夷は病気で朝廷に出られなくなると、密かに紫の冠を入鹿に授けて、大臣に任じて、その名を呼んで物部大臣と言った。これは、蝦夷の母は物部守屋の妹ですから、父の馬子が守屋を滅ぼした後に、その財産を併せたので、その子を入鹿に物部を名乗らせたのです。勝手に大臣を任じたりしたのを見ても、如何に彼が朝廷を蔑ろにしていたかが分ります。

入鹿の無道

その頃、世間では聖徳太子の御遺徳がなお盛んで、御子の山背大兄王の人望はいよいよ高く、人々は王が早く天皇におなりになるのを待っていた。けれども、父の蝦夷すらその賢明さを恐れてお立てしなかったのに、彼よりも一層わがままな入鹿が、どうして御位にお即けしようなど思うのでしょうか。却って王の人望のあるのを憎んで、ついに不埒にも入鹿は兵を出して王の宮を攻めさせました。

その時、王の家来の三成という者が実によく戦って、寄手の大将の一人を射殺したりしてよく防いだので、敵が恐れて、さっと引退いた隙に、王は馬の骨を神殿に置いて、密かに一族の方々および従者を連れて、逃れて生駒山に隠れた。入鹿の兵らは、それとは知らずに火を放って宮を焼きましたが、灰の中から骨を見出すと、それを王の御遺骸と思って、囲みを解いて引上げた。

第17話 蘇我氏の滅亡

やましろおおえの おう むていこう
山背大兄王の無抵抗主義

王は45日の間、山の中に隠れておいでになったが、食物が得られなかったので、従者の一人は王にお勧めして、「一時東国に参って、兵をお集めになれば、必ず勝てます」と申し上げた。王は、「そうすれば必ず勝てるであろうが、わしは十年の間、人民を使うまいと思っているし、わし一人の為に大勢の者に迷惑をかけたくない。又、後の世に、わしの為に親を喪ったと民からいわれるのもいやである。何も戦いに勝つばかりが能ではない。身を棄てて国のためを図るものこそ大丈夫というべきである」と言ってお聴入れにならなかった。

そのうちに、王を山中に見つけて入鹿に知らせた者がいた。入鹿は聞いて、大いに恐れて、高向国押という者に、軍を率いて、すぐに山に行行って王を捕えよと言いつけたが、国押は、「私は天皇の宮をお守りするのが役目でありますから、外へは参りません」と言ってお動かなかった。この「天皇の宮を」といわれたのには、さすがの入鹿も強いる訳にはいかなかったもので、止むなく自分で行こうとしたが、これを止める者がいたので、他の軍将らを遣って生駒山を探させた。

ところが、山背大兄王はこの時は既に山から還って、元の宮の近くの寺に入っておられたので、入鹿の軍将らもまた山から引き返して、寺を囲んだ。そこで王は従者をして軍将らにいわせられた。「わしが兵を起こして入鹿を討てば、必ず勝つに相違ないが、わし一人の為に大勢のものを殺したりするのは本意ではないから、わしの身体を入鹿にやろう」と。そして一族の方々と共に、縊れて（首をくくって）お薨れになりました。

聖徳太子の時から、このご一家は特に篤く仏教を御信じになっておられたので、従って慈悲心が深く、いわゆる無抵抗主義を執られたのでしょう。こういう身分の高い、人望のあるお方が、十分に勝てる見込みがあるにも拘らず、戦わずして、無道な入鹿のために滅ぼされたことを思うと、誠に残念な気がします。

が、この入鹿の無道には、さすがの父の蝦夷すら怒って、「入鹿の馬鹿者め、こんな悪事を働くようでは、貴様の命も長くはないぞ！」と罵ったということですから、世間の人々がいかに憤慨したかは想像に余りあります。ただ、蘇我氏の勢力がいかに盛んで、まともに対抗出来るほどの者が一人もいなかったもので、誰も心には憎んではいても手が下せなかったのです。

なかとみのかまたり あらわ
中臣鎌足が現れる

けれども、こういう無道がいつまでも続くものではありません。やがて大忠臣が現れて、国家のために悪人を滅ぼすに決まっています。

その頃、中臣鎌足という人がいました。嘗て仏教が伝来した時に、物部尾輿と共に蘇我稲目に反対した中臣鎌子から6代目の孫で、父は御食子といました。小さい時から聡明の聞こえが高く、学問にも秀で、武芸にもすぐれていましたが、とりわけ忠義の念に非常に篤かったのです。

元来、この中臣氏は、前にも述べたように、高天原の朝廷以来、専ら祭祀を掌って来た名家でし

第17話 蘇我氏の滅亡

て、皇室とはご関係も特別に深かったのです。今、入鹿が君臣の別を乱して、わが国体の尊厳をも傷つけるような行いをしているのを見ては、だまっていられよう筈がありませんでした。

それで鎌足は、何とかしてこれを滅ぼして、世を救おうと思い立ったのですが、この時の蘇我氏の勢力は、実に皇室をも凌ぐほどであった上に、入鹿も人物としては決して凡人ではなかったので、逆も自分一人の力ではどうすることも出来ないのが分かっていました。



けまり なかのおおえのおうじ なかとみのかまたり
蹴鞠の会での中大兄皇子と中臣鎌足

なかのおおえのおうじ ご英明な中大兄皇子

鎌足は皇族の中で最も英明なお方を上に戴いて、共に事を謀ろうと思い、そのお方を心の中で誰れ彼れとお選び申した末に、舒明天皇の御子の中大兄皇子を、このお方こそ思ったのですが、まだお近

しくしていなかったの、すぐにはその 考 えをお 話 することが出来なかった。

たまたま法興寺の楓の木の下で蹴鞠の会のあった時に、皇子のお靴がまりをお蹴りになったはずみに
脱げ落ちたのを鎌足がすぐに拾って、手の平に捧げて進んで、跪 いて 謹 んで差上げますと、皇子も 跪
いて丁寧にお受けになった。

これがご縁となって、皇子は鎌足と親しく交わられるようになりましたから、そこで、鎌足はその 心
の中を隠さずお話しすると、皇子も日頃お 考 えになっておられたことを語られた。 二人の考えはぴつ
たりと合いました。 それで、いよいよ熱心にその計画をご相談なされたが、二人が俄かに頻繁に往った
り来たりするのを人に 疑 われてはいけないからと、賢明な皇子と鎌足とは、共に 儒 教を南 淵 先生の家
へ学びに通って、その往復の路で、肩を並べて歩きながら細かい相談をしました。

入鹿 誅 戮 の計画

けれども、計画を実行するには二人きりではだめです。 有力な味方が要る。 鎌足は皇子にお勧め
して、先づ蘇我倉山田麻呂を味方に引入れた。 倉山田麻呂は同じく蘇我の一族ではありましたが、忠義の
念に富んでいましたし、入鹿とは仲も善くなかったのです。 又、いざという時には、力の強い、武勇な
者がいなければならないので、その頃 評 判 の高かった勇者の佐伯子麻呂と稚 犬 養 網 田という二人をも
味方にした。

入鹿の 僭 上

ちょうどその頃、そんな事があろうとは少しも知らずに、入鹿は甘 檜 岡という処に二つの立派な家
を造って、父の蝦夷の家を上 宮門といい、自分の家を 谷 宮門といった。 そして男女の子らを王子と呼
ばせた。 すべてを皇室と同じにしたのであります。 なんとという 僭 上 な振舞いであつたでしょう。
その上、家の外には城 柵 を設けて、門のそばには兵庫を作って、常に力の強い者に武器を持って守ら
せていた。 そして出歩く時には、いつも 50 人の兵を連れて、身の前後を護衛させていた。 それで、正 面
から攻めて、これを滅ぼすことなどは逆も出来なかったの、中 大 兄 皇子と鎌足はいろいろ相談なされ
て、三韓の使いが貢 物を 献 上 する日に、その儀式の場所で入鹿を 誅 することに定められました。

大極殿で入鹿を 誅 す

時は皇 極 天皇の 4 年 6 月 12 日、所 は大極殿です。 時刻になると、入鹿をはじめ多くの役人は定
めの席に着き、天皇もお出ましになった。 三韓の使いは貢 物を 奉 ろうと席にかしこまります。
倉山田麻呂は玉座の前に進んで、三韓の表 文 を読み上げ始めた。
その時、中 大 兄 皇子は、御所の 1 2 の門を閉めさせられて、外部との往来を絶ち、御自分は矛を持
って御殿の側に隠れられて、鎌足は弓矢を持ってそのおそばに控えた。 佐伯子麻呂と稚 犬 養 網 田とが入
鹿を斬る手筈になっていたの、箱の中の 2 口の剣を授けて、鎌足は、よいかそれ斬れ、と言いつけまし
たが、二人は入鹿の勢いに恐れて、ぐずぐずしています。 鎌足は叱って励ましています。
倉山田麻呂は既に表 文 を読み終わろうとしているのに、約束の子麻呂が出て来ないので気が気では

第17話 蘇我氏の滅亡

ありません。 たらたらと汗を流して、声は乱れ、手は震えます。 入鹿は怪しんで、「なぜ震えるのか？」と訊きます。 倉山田麻呂は、「天皇の御前に近いので、恐れ多くて」と纔かに答えます。 今はもうぐづぐづしてはいられないので、中大兄皇子は、「やあ！」と叫ぶと共に、子麻呂らと共に飛び出して入鹿の肩先に一撃を加えました。

入鹿は玉座の前に転げて行って、「私に何の罪があります？ どうぞお取調べを」と願いましたので、皇極天皇は大いに驚かれて中大兄皇子に、どうした事かとお尋ねになった。 それで皇子が、「入鹿は皇族を悉く滅ぼして、御位を奪おうとして居ります。 入鹿を天孫に代えることは出来ません」とお答えすると、天皇は起って奥にお入りになった。 入鹿はもはや逃れることが出来なかった。 子麻呂と網田が彼を殺しました。 その日は雨が降って庭に水が溜まっていたので、入鹿の死骸には蓆をかけました。

蝦夷の最後

中大兄皇子は直に法興寺に入って、戦いの用意をされた。 他の皇子方をはじめ、重な役人らは皆皇子のお身方に随った。 そこで入鹿の死骸を蝦夷のところに届けさせられると、蝦夷の家では俄かの事に大騒動で、その部下の者らは蝦夷のために起って大いに戦おうとした。 しかし、皇子が更に使いを出して、わが国には昔から君臣の別が明らかに定まっているという事をよく説いて聞かせられると、蝦夷を助けようと思っていた者共も、なるほどその道理を悟って、弓を折り刀を棄てて逃げてしまった。 蝦夷も今はこれまでと覚悟を決めて、家に火を放って自殺しました。

宣化天皇の二年に稲目が大臣となって政治に参与してから、実に百余年で蘇我氏の本家は滅びたのであります。 いかに勢力のある名家であっても、悪事を働く者が出るようになっては永くは栄えません。 が、あれほどまでに勢力のあった蘇我氏を、戦わずして滅ぼされた中大兄皇子の美事なご功績は、皇子をお助けした鎌足の忠義と共に、永く後の世に語りつながれて、今もわれら日本国民に楽しく打仰がせているのであります。

(第17話 蘇我氏の滅亡 終わり。 次は前頁に戻り、 第18話 大化の改新 へ)